實 驗

フエーヤ氏病ノ病因ニ就テ

Aus der Universitäts-Kinderklinik in Würzburg Zur Pathogenese der Feerschen Krankheit
von Prof. H. Rietschel (D. m. W. 1923 Nr. 19)

中 島 榮 太 郎 抄 譯

〔抄譯者序言〕——私ハ陸軍軍醫ノ現職ニ在ル關係上、地方一般患者殊ニ小兒患者ニ接スル機會ガ非常ニ尠ク、殊ニ昨年八月陸軍騎兵學校附ニ補セラレテカラハ、殆ド全ク其機會ガナクナツテ了ツタ。斯ウシタコトカラシテ輒近ニ於ケル小兒科學方面ニ如何ナル新知見ガアツタカ、又如何ナル方向ニ進歩發展シ或ハセントシツツアルカニ就テハ全クノ白紙デアツテ、只僅ニ一般醫學雜誌ニ發表セラレタル論說、原著抄録等ノ小兒科ニ關スルモノニ就テ時折知識ヲ得ルノミデアル。從ツテ今茲ニ抄譯セントスルフエーヤ氏病ニ就イテモ亦全然豫備知識ヲ有シテキナイノデアル。ソレ故ニ非常ニ珍シク感じタ。専門外ノ私如キモノガ持ツテ成書ニハ本病ニ關スル記載ガナイ。或ハ他ノ病名ノ下ニ記載シテアルノカモシレナイガ菲才ニシテ本病ト同一疾患デアルト想フモノヲ發見シ得ナカツタノデアル。多クノ醫家中ニハ私ト同ジ境遇ノ下ニ在ル方々モアルデアラウ。而シテ又原著ヲ見逃シニナツタ方々モアルカモシレヌ。私ハ之等ノ方々ノ參考ノ爲メ並ニ私ノ記憶ヲ確カニスル爲メニ原著ヲ抄譯スルコトヲ敢ヘテスル次第デアル。元ヨリ博學並専門家ノ諸士ハ既ニ周知ノコトデアルカラ、抄譯ニ當リテハ單ニフエーヤ氏病ノ概念ヲ知り得ル程度ニ止メル。從ツテ著者ノ論ゼントシアル點ヲ省略スルノ傾向トナルデアラウ。

フエーヤ氏病 Feersche Krankheit ハ確カニ一種特有ノ臨牀的症候ヲ呈スルモノデアツテ、近年殆ト全國ニ於テ之ガ臨牀的ニ認めラルルニ至ツタノデアル。

其ノ重要ナル臨牀的症候ハ、

(1) 年齢——本病ハ特ニ幼若兒童ヲ侵シ、罹患兒童ノ殆トハ五歳以下ノモノデアル。早キハ三ヶ月半及ビ四ヶ月ノ乳兒ガ本病ニ罹ッタ例モアル。又各症例ニ就テ觀ルト六歳以上ノモノモアルガ十一乃至十四歳ノモノハ全ク稀デアル。

(2) 性別——男女兒ニヨル罹患率ノ差異ハ認メラレナイ。

(3) 季節——本病ノ大多數ハ冬及春ノ季節ニ發生スル。

(4) 症狀——本病ハ徐々ニ襲來スル疲勞、不機嫌、食思不振ヲ以テ始マリ、終ニハ疲憊其極ニ達シ最早起坐シ能ハザルニ至ル疾患デアル。

癢痒刺激——非常ニ不愉快ナ癢痒刺激ガアル。癢痒刺激ハ又多ク場合ニ於テ指趾等遠隔部位ノ疼痛性異常感覺の *merzhafte Parästhesie* トナル。夫レガ爲メ患兒ノ睡眠ハ著シク障礙セラレ、元氣ガナクナル、憂鬱トナリ、精神的抑鬱 *Psychische Depression* ニ陥リ、本病ハ茲ニ特有ノ症候ヲ呈スルヤウニナルノデアル。

疲勞——疲勞ノ程度ハ著シク強イ。重症ノモノデハ步行ハ勿論、起ツコトモ坐ルコトモ出來ナイヤウニナツテ、數週數月ノ長イ間病臥セザルヲ得ナイ狀態トナル。此ノ際ト雖モ筋肉ノ運動ハ全然障礙セラレテキナイ。筋萎縮ニ就テハ未ダ定説ガナイ。屢々手指ノ輕度ノ震顫ヲ觀ル。

腱反射 多種多樣デハアルガ、初期ニハ多クハ亢進シ、後ニハ減弱スル。時ニハ消失スルコトモアル。バビンスキーハ每常之ヲ缺キ、筋肉ノ電氣反應ハ障礙セラレルコトガナイ。

腦脊髄液——每常正常デアル。叡知及意識 *Intelligenz u. Bewusstsein* モ亦正常デアル。屢々羞明ヲ伴フ。

皮膚ノ變化 之ハ最モ必要ナル症候デアル。發汗ハ極メテ強ク且ツ必ズ存在スル症候デアツテ、其持續ハ長クシテ月餘ニ亙リ、其爲メニ汗疹(赤色粟粒疹 *Miliaria rubra*)、發疹(麻疹、風疹或ハ猩紅熱樣ノ發疹)ガ生ジ、時ニハ膿疱疹ヲ形成スル。又屢々猩紅熱落屑ノ如キ破壞ガ手足ニ現ハレルコトモアル。而シテ遂ニハ手足ノ如キ遠隔部位ハ「チアノーゼ」ヲ呈シ

鮮紅色ヨリシテ紫藍色ヲ呈スルヤウニナル(Pink disease)脱毛、爪溝炎モ亦屢々現ハレル症候デアル。

循環器系ニ於テ見ル變化トシテハ頻數脈ガアル。脈搏ハ睡眠中ト雖モ頻數デ、一二〇—一七〇—二〇〇至。血壓ハ高ク一二〇—一二三〇mmHg。血液ノ變化トシテハ屢々輕度ノ白血球增多症ヲ示シ、多核白血球ノ比較的增加ヲ伴フコトガ多い。血糖ハ多クノ場合僅ニ上昇スル。

其他著明ナル症候トシテ高度ノ鼻咽頭炎(Sekretionsneurose)ガアル。又食思缺乏、流涎ヲ伴ヒ、舌及ビ頬粘膜ハ炎症及ビ潰瘍ニ陥リ易キ傾向ヲ有シ、而シテ齒齦ノ壞死ヲ來シ健全ナル齒牙ノ脱落ヲ觀ルコトガアル。本病ノ病因ニ就テハ全ク不明デアルト云ヒ得ル。一般ニハ本病ハ中樞神經系ノ感染ニヨルモノトセラレテキルガ、其根據ハ薄弱ト云ハネバナラヌ。感染ニ因ヲ索ムルハ屍ノ病理解剖學的所見ニヨルモノデアルガ、屍ノ大多數ハ本病ニヨリテ死亡シタルモノニ非ズシテ、本病ノ經過中ニ敗血症、肺炎、結核等ノ疾病ヲ惹起シテ死亡シタルモノニシテ解剖モ亦是等ニ就テナサレタルモノデア。神經系ノ解剖所見モ亦種々デアツテ、或ハ末梢神經ノ炎症ヲ認メ、或ハ瀰蔓性脊髓炎ヲ觀察シ、或ハ又網狀織内皮細胞ノ増加ヲ伴フ腦膜炎デアル等々。フーエ氏ハ本病ハ流行性腦炎トハイネ・メデン氏病トノ中間ノ疾病デアルト云フテキ。其理由ハ腦ノ炎症性疾患ノ際ニハ植物神經ノ中樞ガ侵サレ、本病ニ於テモ亦同ジク全植物神經系ガ侵サレルカラデア。然シ乍ラ此ノ感染說ニ對シテノ反對論モアル。即チ

(1) 一般ニ本病ハ無熱ニ經過スルモノデアツテ、有熱ナルハ第二次感染ヲ蒙リタルモノデア。本病ノ症候ハ極メテ徐々ニ現ハレル。之レ感染ニ因スルモノナラザルヲ意味スルモノデア。

(2) 腦脊髓液ハ每常異變ヲ認メナイ。時ニバンディ氏反應陽性、輕度ノ淋巴球增多ヲ報告スルモノアルモ、之ハ全ク稀有ナル所見デア。

(3) 本病ノ腦炎ナラズトスル反對論者ノ最モ主要ナル根據ハ、本病ハ全然後障礙ヲ貽スコトナク治癒スル點ニ在ル。死亡ノ殆トハ合併或ハ續發症ニヨツテ來テキル。若シ本病ガ流行性腦炎、ハイネ・メデン氏病、或ハ其他ノ主要中樞ノ感染

實驗

フエーヤ氏病ノ病因ニ就テ 中島榮太郎抄譯

六〇

性疾患デアルナラバ、何等カノ障礙ヲ貽サネバナラス譯デアルガ、實際ハ腦、脊髓、末梢神經ノ何レニモ變化ハナク、完全治癒 Restitutio ad integrum アルノミデアル。然ラバ感染性腦炎說ニ換ルベキ說ガアルカ？キユーエル Kuhl 氏ガ Thomas, Elliot, Armour, Kern 氏等ト研究シタルトコロニヨルト、副腎皮質ノ細胞ハ第一歳ニハ變性及ビ萎縮シ、第二歳以後ニハ髓質ガ成長シ、結締組織ガ消失シ始メテ、遂ニハ皮質ト髓質ガ直接ニ接觸スルヤウニナル。此ノ機轉ハ八歳ニナツテ完成スルノデアルガ、若シ髓質ガ異常ニ早ク成長シテ皮質ト髓質トノ機能ニ相互關係ノ失調ヲ來ス時ハ、茲ニフエーヤ氏病ガ發現スルノデアル。即チフエーヤ氏病ハ副腎皮質ノ機能減弱ト副腎髓質ノ機能亢進トニヨル症狀デアル。

然レ共キユーエル氏假說即チ副腎說ノミニヨツテ本病ノ症候群ヲ説明スルハ困難デアル。本病ハ恐ラクハ小兒期ニ於ケル全内分泌異常ニヨツテ起ルモノデアロウ。即チ本病ハ極メテ徐々ニ起リ、其全經過中ニハ精神的及ビ身體的症狀ガ交々現レ來リテ、數週數月ノ後ニ完全治癒ヲ營ム邊リハ正シク内分泌腺ノ異常ヲ首肯セシムルモノガアル。又冬及ビ春ハホルモン障礙ノ容易ニ起ル時期デアル。

要之、フエーヤ氏病ハ小兒ニ於ケル内分泌ノ生理的發育機轉ガ病的變化ニ陥リタルモノト云フコトガ出來ル。勿論生理的狀態カラ重キ病的症候ヲ呈スルニ至ルマデニハ幾多ノ移行型ガアルモノデアツテ、フエーヤ氏病ノ頓挫型モ亦屢々觀ラルルトコロデアル。